

私をめぐる、ひとつの要約としての「自画像」についての試論

石 崎 達 也

はじめに

「私への問い」、そして「私からの問い」。このふたつの折り重なる問いのはざまで、「私を生きる」ということの意味を考えるようになってから、10年程前に描いた「自画像」のことが気になりはじめた。そして今、「描いた私」は「描かれた私」からのまなざしによって「いかに生きるか」という人生の問いを投げかけられている。

「自画像」については今日に至るまで、主に美術史あるいは美学の観点からさまざまな考察がなされてきた。美術史というジャンルの中での「自画像」は、「肖像画」のひとつとして扱われてきている。さらに、今日の自画像研究は、優れた芸術家の描く作品を中心として展開されてきたといえるであろう。たとえば「自画像」を通して、当時の宗教的・時代的背景の研究がなされたり、あるいは特定の芸術家が描いた「自画像」を手がかりとして、彼らの精神や内面性の研究がなされてきたのである。こうした従来の研究手法は「自画像」をひとつの媒介として用いてきたにすぎず、「自画像」を描くという営み、それ自体に関心を向けてこなかった。本稿において筆者は、「自画像」をめぐる語りに着目し、それをひとつのテキストとして見立てることによって、これまでの研究手法によっては読み解くことのできなかった「自画像」への新たなアプローチの可能性を模索してみたい。

一方、本稿は筆者の卒論「E. レヴィナスの〈substitution〉の概念について」において脚注に追いやられてしまい、十分に議論されることのなかった「自画像」という問題提起を、レヴィナスのテキストにおける〈私〉をめぐる語り、そして彼の〈顔〉をめぐる語りの様式^①を通して考察することを目的としている。言い換えれば、これは、レヴィナスのこ
とばを手がかりにして、「私が、私を描く」、という営みの只中にある幾重にも折り重なった体験を、ことばに紡ぎ直していく試みである^②。

1章、「自画像」をめぐる語り

「自画像」を描くとは一体、どのような行為なのだろうか。

「自画像」を描くときの対象は、自分自身である。〔描く私〕は対象である自分自身を直接見ることはできない。さらに言うなら、〔描く私〕は自分の顔を終生見ることができない。何かに映る自分を見て、その自分を描くということ。「自画像」を描くというプロセスにおいては、この行為がくり返される。この行為は、〔描く私〕が何かに映る私、つまり〔対象化された私〕を描くということである。しかし〔対象化された私〕とはいえ、描いている対象はやはり私である。〔描く私〕にとって「自画像」を描くとき、どのような感覚がもたらされるのであろうか。それは、自分以外の他の対象を描くということと何か異なるものなのであろうか。

たとえば、対象が自分の顔ではなく、他者の顔である場合の描くという行為と比較して考えてみる。描く対象が他者の顔である場合、その顔の輪郭を把握した上で、ある視点で区切り、その方向性を保ちつつ試行錯誤を繰り返しながら描くことができる。しかし、「自画像」を描くという行為の対象は〔描く私〕としての自分自身（対象—私—描く私）である。対象とは物理的な距離はないが、私が二極に分裂したような状態で描くという行為が行われる。このような状況下では〔描く私〕は〔対象化された私〕のすべてを客観的に把握することが困難なため、ある視点で区切り、その上で一定の方向性をもって描くということが限りなく不可能に近い事態がもたらされる。つまり、「自画像」を描くという行為は、〔描く私〕と〔対象としての私〕とは、物理的に距離はないが、その行為自体が私を〔描く私〕と〔対象としての私〕という二つに引き裂いているため、「私は、私である」という一致の感覚がもてない状態で行われることとなる。これは他の対象を描くという行為と大きく異なる点である。

何かを媒介としてしか見ることができない〔私の顔〕。他者の顔は見ることはできるが、自分の顔は〈映った／写ったもの〉でしか見ることはできない。触れるという次元では一番近い顔であったはずの〔私の顔〕は、見ることによって、もっとも遠い顔となる。これは、他者の顔よりも遠いものとして「私の顔は、ある」ということでもある、とも言えるであろう⁽¹⁾。

一方で、描くという行為は、表現するということでもある。この「表現する」ということを「自画像」を描くということに照らして考えてみると、「〔描く私〕が、それを〔描く私〕を表現する」と言うことができる。これは〈見る⇔描く〉という一連の行為の繰り返しとし

て理解されうる。

描き手は、「自画像」をほとんど自分のため、描き手自身の欲望を満たすために描くと言われている。それは一種の存在証明としての側面をもつ。「自画像」を描こうとすると、〔描く私〕は私のすべてを描こうと欲望する。しかし、自分の顔は映し出されたものとしてしか目にすることができず、完全なる全体像として把握することはできないので、自分自身の断片をつなぎ合わせることでしか表現することができない。このように捉えると「自画像」を描くという行為は、私の断片をつなぎ合わせる行為であるとも考えられる。しかし、私はパズルの完成型を知らない。完成型を知らない以上、この断片を集めることによって私のすべてを描きたいという欲望は満たされることはないであろう。

また、一旦「自画像」が描かれたとなると、今度は描かれた「自画像」が見られる対象となる。そこに〔まなざしを向ける私〕が現われてくる。「自画像」に〔まなざしを向ける私〕には、どのような体験がもたらされるのであろうか。

以上、「自画像」をめぐる語りから、「私が、私（の顔）を描く」という行為について考察してきた。これを整理してみると、「〔対象化された私〕を描く行為である」ということ。「それは私が二極に分裂したような状態をもたらすということ」。「描くという行為においては〔私の顔〕がもっとも遠い顔となるということ」。「〈見る⇔描く〉という行為の繰り返しであるということ」。「〔自画像〕は私のすべてを描きたいという欲望によって描かれる行為であること。だが、その欲望は満たされることはないということ」。「描かれた〔自画像〕は見られる対象となり、それに〔まなざしを向ける私〕が現われるということ」といった点に集約されると考えられる。

これらのことから、「自画像」を描くという行為が、私に複雑な体験をもたらすものであることが予測される。「自画像」の語りを体験としての私から語ろうとすると、〈私〉〈顔〉〈欲望〉ということばが立ち現われてくる。

そこで次章では、この体験を語る手がかりとして、レヴィナスの語りの^{スタイル}様式を検討してみる。

2章. レヴィナスの^{スタイル}様式

レヴィナス（1961）によれば、哲学は世界を対象化して「見ること」によって理解しようとする。たしかに「見ること」は、世界を把持・理解するためには必要不可欠である。しか

し、彼によれば、他者を対象として「見ること」でその方向性を保ちつづけるという行為は、「〈同なるもの〉のうちに〈他なるもの〉を還元してしまうこと」であり、他者の他者性を否定することに他ならない⁽¹⁾。彼は哲学の根拠を倫理学に求め、倫理は〈顔〉という体験からのみ考えるべきであると考え。ここから、彼は〈顔〉をひとつの体験として語るのである。このようなレヴィナスの言説は独特の^{スタイル}様式をもち、主体性の問題への新たな問いを提起している。20世紀後半における主体への批判は、哲学上もっとも重要な成果であると言われているが、主体性への批判にはさまざまな形態があり、それは現代思想のほとんどすべてを網羅しなければ理解できないほど複雑である。その中でも、レヴィナスの言説は伝統的なある種の人間主義を揺るがす力を持っていると言われているが、彼が用いた方法は、主体性への〈他者〉からの接近という手法であった⁽²⁾。また、現在、ラカン、ドゥルーズ、リクールに見られるように、欲望の問題が現代哲学の中心の問題として取り上げられるようになってきた。この欲望の問題に関しても、レヴィナスは「他者への欲望」という視座から論じている。

このようなレヴィナスの思想が、筆者の「自画像」への新たなアプローチを試みる上で、重要な手がかりとなる。

しかし、本研究はレヴィナスの思想研究とは一線を隔している。彼の思想におけるさまざまな言説の解釈ではなく、あくまでレヴィナスが『存在の彼方へ』を語る、その語りの^{スタイル}様式に注目し、その様式によってもたらされる視座から「自画像」を考察していく。

本章ではまず、レヴィナスの二つの主著『全体性と無限』から『存在の彼方へ』へと至るプロセスにおいて提起された〈私〉の語り、〈顔〉の語りを捉え直し、整理してみる⁽³⁾。

(1) 主体としての〈私〉の語り

レヴィナスは〈ある〉(il y a)の構造に着目し、人称的存在の主体としての〈私〉は〈実詞転換〉によって成立するということを論証している。さらに論を進め、彼は〈再帰〉という項においては、この主体の構造を明らかにするために〈再帰代名詞 se〉の性質に着目する。

「すべてはあらかじめ対格としてある、——これこそが自己の例外的条件あるいは自己の—非—条件、代名詞〈Se〉の意味作用である。そもそも、ラテン語の文法は〈Se〉の主格を「知ることがない」。」⁽³⁾

フランス語の文法上、対格である〈再帰代名詞 se〉は主格に依存することなく、他動詞から自動詞へと転換するために必要とされる。例えば、「私は自己を見失う＝迷う」(je me perds.)「私は自己を取り戻す」(je me retrouve.)における〈me〉がそれにあたる⁽⁴⁾。このような〈再帰代名詞 se〉の性質からレヴィナスが導き出すのは、主格としての〈自我〉と対格としての〈自己〉という語りの^{スタイル}様式である。

レヴィナスは、〈自我〉が「意識」の「実的部分」でも「実在するもの」でもなく、「ひとつの存在様式」であることを論証するために、フッサールの『内的時間意識の現象学』における自我論を出発点として、自らの〈自我〉の^{スタイル}様式について語る。

まず、〈自我〉を「現在」として捉える。この「現在」としての〈自我〉は固定した点的な実体ではなく、〈私〉が時間化していく、その^{スタイル}様式のことである。このような〈自我〉は、受動的に構成されたものである〈享受された私〉であると同時に、意味の起源として、自ら構成するものである。

「人間の主体——認識し活動する意識的〈自我〉——は、概念のかかる逆転、有限性というこの出来事の転回軸として解釈される。存在者としては人間主体は概念に従属しており、概念は人間主体の特異性を四方八方から包み込み、普遍的なものと死のうちに人間主体の特異性を吸収する。」⁽⁵⁾

次に、レヴィナスの語る〈自己〉の^{スタイル}様式に目を向けてみる。

〈自己〉とは、「〈下に投げ出されたもの〉(sub-jectum)、〈自己〉は宇宙の重みに押しひしがれ、万事に責任を負っているもの」⁽⁶⁾であり、〈自己〉にとって重要なのは、「その存在のうちで存在することではない」⁽⁷⁾。「休息の手前」、言い換えれば、「起源の手前にある」⁽⁸⁾と言うことであると述べている。また、〈自己〉は身体によって〈感受性〉そのものと化し、彼は〈私〉のなかの〈自己〉に〈身代わり〉をみる。また、レヴィナスは〈再帰代名詞 se〉のなかに、この〈自己〉の^{スタイル}様式を見出す。〈自己〉の表れである〈se〉が動詞と結びつき、主題化のうちで動詞に受動型を付与することによって磨り減ってしまうとき、その本来もっている対格性はほとんど目に留まらないものと化してしまう。この磨り減ってしまっているときの〈se〉は、主格(je)対格としての〈私〉(me)を〈身代わり〉の〈自己〉たらしめる〈他者の痕跡〉に他ならないということである。

「主体性とは代替不能な自己自身である。が、厳密に言うなら、主体性は、その自同性のうちに主格として定位された自我ではない。そもそも初めから、主体性は～を余儀なくされている。一種の対格として、そもそも初めから責任を負わされ、この責任を回避することができないのだ。」⁽⁹⁾

レヴィナスが語っているのは、主体としての〈私〉とは、代替不能な〈自己〉そのものであるが、厳密に言うなら、〈私〉はその〈自己〉同一性のうちに主格として定位された〈自我〉ではない、ということである。意味の起源としての志向性をもった〈自我〉は、「諸々の目的を追求する存在である」⁽¹⁰⁾ ため、〈自己〉の存在がないと、〈自己〉同一性という帝国主義の支配に陥る危険性をもつものであると述べている。

ここで再び、レヴィナスの〈再帰〉の文脈に立ち戻る。

「〈se〉という対格、それは自己を失いつつ自己を再び見出すという事態にほかならない。」⁽¹¹⁾

「自己への再帰こそ主体の真の問題なのだ。」⁽¹²⁾

レヴィナスの〈再帰〉(réurrence)は「還元」や「自己回帰」ではない、ということである。〈主体〉の再帰には、「自己省察」および「自己反省」をつうじて自己が自己を所有するような自由はない。

「主体の再帰は、私の権能の能動性〔債権〕を超えたものとして他人から到来する要請であって、かかる要請が私のうちに生ぜしめる制限なき「欠損」において〈自己〉は、損得勘定することなく自由に自己を消費する。存在することの苦しみおよび残虐さの全重量が、それを支え、それを贖う一点にのしかかるのだ。」⁽¹³⁾

あるいは、〈再帰〉とは「記憶可能ないかなる過去、現在に転換可能ないかなる過去よりも遠く過ぎ去ったものである。」(同)つまり、〈再帰〉とは、記憶可能な時間を超えて〈私〉を無限の彼方へ連れ出すのだ。以上のように、レヴィナスは〈私〉をめぐる〈自我〉と〈自己〉の様式を^{スタイル}〈再帰〉という文脈の中で語るのである。

引き続き、レヴィナスの語る〈私〉に関して、〈古い〉という文脈から明らかにしてみる。

「主体は他人のために〔他人の代わりに〕ある。主体の存在は他人をめざして進みつつ消え去ってゆく。主体の存在は死に、意味と化す。老いゆく主体性は唯一無二で、代替不能な主体性である。老いゆく主体性はこの私であって他の私ではない。にもかかわらず、老いゆく主体性は、逃げられない服従のうちに、意に反して存在している。ただし、この服従は反抗の芽を隠しもっていないわけではない。服従と反抗という相反する特徴は、しかしながら、どんな関与にも先だつ、〈他者〉に対する責任のうちに溶解してしまう。」⁽¹⁴⁾

レヴィナスが主体としての〈私〉を語るとき、〈自我〉と〈自己〉、この両者の様態のごめきは〈老い〉(viellissement)あるいは〈倦怠〉(laisstitude)という文脈で語られることがある。ここでの〈倦怠〉、〈老い〉とは、〈自己〉に反する、あるいは裏切る〈自己〉の様態として述べられている。

「自己に反してということが、生きることそのものにおける生をしづけている。生とは〈生に反する生〉である (La vie est vie malgré la vie.)」⁽¹⁵⁾

〈自己〉に反して生きるということは、生が自らを維持しようとする一方で、〈自我〉が〈自己〉へと反転することによって、避けがたく〈自己〉を喪失していくプロセスに他ならない。〈老い〉という不断の自己喪失——老いゆくという過程において、主体としての〈私〉は〈自己〉になり、やがて〈自己〉そのものが失われる。レヴィナスが主体の様態を語るとき、主体としての〈私〉は〈自己〉との関係における〈差異〉となる。

以上、レヴィナスの語る〈自我〉と〈自己〉の様式^{スタイル}を手がかりとして、彼の〈私〉をめぐる語りを考察してきた。彼が〈私〉を語るとき、そこには、「私は、私である。」という〈自己〉同一性を維持したいと欲望する〈私〉と、老いゆく〈私〉のあいだの決定的な〈差異〉そのものが現われてくる。

(2) 〈顔〉(visage) の語り

前述したように、レヴィナスは〈顔〉をひとつの体験として語る。彼の〈顔〉に関しては、さまざまな観点から研究がなされてきているが、ここでは、レヴィナスの〈顔〉の語りを考察する。

「自分自身の痕跡として、顔は私の責任に差し向けられるが、罪を犯したものとして、私はかかる顔を逸する。いうなれば私は、顔が死ぬことに対して責任を負っており、自分が生き残ったことに対して罪を負っているのだ。顔とは、直観的志向の直行性に供される形象の直接性より以上にぴんと張りつめたアナクロニックな直接性である。」⁽¹⁶⁾

「隣人の顔は、私を見つめ、私と関わる。隣人の顔のすべてが私を見つめており、それゆえ、私と無関係なものは何一つない。空間の空虚に遺棄された隣人の顔ほど強制力を有しているものはない。この空間の空虚、それは、中に入れないものとして過ぎ越す無限者の痕跡である。この痕跡のうちに、顔は不在の痕跡として、皺のよった皮膚としてうがたれる。顔の美しさは二面性を有していて、それは、自分自身の影でもあるような現前、アナクロニックなし方でみずからの痕跡のうちに潜む存在の奇妙な向性でもあるのだ。」⁽¹⁷⁾

「顔は、顔と同じように人格的な何らかの実在の仮象ないし徴示ではない。このような仮象や徴示は表情によって隠蔽ないし表出され、不可視の主題として供されるからだ。(……) 顔は主体を強迫する。主体と相関関係を結ぶことも、意識のうちで私と同等のものとするともなく。」⁽¹⁸⁾

このように、さまざまな文脈に顔を出すレヴィナスの〈顔〉という言葉は、あたかも読み手に自分の顔や他人の顔として、あるいは肖像として理解されることを拒んでいるかのように見える。〈顔〉の絶対外部性、「非現象」(non-phénoménalité)としての〈顔〉といった〈顔〉の特質を表わしているかのように見える断片から考えても、レヴィナスの〈顔〉は、私たちが「これが、顔である」と理解しているものとの不調和を引き起こす。このようなレヴィナスの〈顔〉が読み手にもたらす感覚は、ある種のざわめきのような感じであろう。

ここで、レヴィナスの語る〈顔〉の様式^{スタイル}に目を向けてみると、ひとつの見解が生まれてくる。それは、レヴィナスの語りの文脈において、さまざまに形を変える〈顔〉とは、読み手とテキストのあいだにズレを生じさせることによって、意味や解釈を拡張していく手段としての働きをもつものなのではないか、という見解である。リクール(1998)は、「隠喩とは、われわれが多義性を拡張していく手段である。」と述べているが、レヴィナスの〈顔〉は、語りの様式^{スタイル}という観点から捉えてみたとき、この隠喩としての働きをもつものであると言えるのではないか。レヴィナスが「顔とはひとつの体験である」と語るとき、その語りの様式^{スタイル}において〈顔〉は隠喩として働いているのである⁽¹⁹⁾。

本章では、〈私〉あるいは〈顔〉という言葉を手がかりに、レヴィナスの語りの^{スタイル}様式について考察してきたが、ここまでで明らかとなったことは、レヴィナスの〈私〉あるいは〈顔〉ということば（に表現されたこと）を語りの^{スタイル}様式という観点から捉え直したとき、それは、ことばとことばのあいだ、そして読み手とテキストのあいだに差異をもたらすような働きをするということである。

3章. 「私が、私を描く」という営みとしての「自画像」

前章において筆者は、「自画像」への新たなアプローチの手がかりとして、レヴィナスの^{スタイル}様式の考察からもたらされた視座について述べてきた。レヴィナスによって語られた〈私〉とは「自己との関係における差異」そのものであり、〈顔〉とは形なきものであり、ひとつの隠喩としての働きそのものであった。

本章においては、このような視座から改めて「自画像」を描くということについて考えてみたい。その際、1章で述べた「自画像」を描くことを「私が、私（の顔）を描く」という営みとして捉え直し、考察を進めていく。

（1）「自画像」と欲望

それにしても、私はなぜ「自画像」を描くのだろうか。この問いを、どのような欲望によって「自画像」は描かれたのであろうかという問いへと収束させてみる。1章でも述べたように、これまで「自画像」は私のすべてを描きたいという欲望や自己顕示という欲望から描かれたものであると言われてきた。だが、「私が、私（の顔）を描く」という営みはこのような欲望によってのみもたらされるのであろうか。

「私一人だ。私は自分の心を感じている。そして人間を知っている。私は自分の見た人たちとはすっかり異なった人間だ。世界のいかなる人とも似ていないと信じている。私のほうが優れてはいないとしても、少なくとも別の人間である。」（ルソー『告白』）⁽¹⁾

私が他の人とは異なっているということ。この他者との違いによって自分の存在が証明される。しかし田中（2003）は、「自画像」を描くという営みは、自己顕示という欲望からもたらされるという捉え方に対して、次のように指摘する。

「画家たちの自画像がナルチシズムになるとき、それは芸術作品として成り立ちえなくなる。自己認識の苦しみを自らの外面を写して表現する、という困難な仕事を引き受けてこそ、自画像として人の眼に耐えうるのであるから、ナルキソスの絵は、芸術作品となっても、画家のナルチシズムの絵は芸術とはならない。」⁽²⁾

「私が、私を描く」という営みにおいては、〔描く私〕と〔対象としての私〕(=〔想像としての私〕)とは、その営み自体が私を〔描く私〕と〔対象としての私〕という二つに引き裂いているため、私は私からもズレていくという事態がもたらされることとなる。「私は、私である」という一致の感覚がもてないことで、私の存在が危うくなる。だからこそ、私は「自画像」を描くのではないか。「私が、私である」という完全なる一致を欲望すること、これが「私が、私を描く」という行為へと私をかりたてるとのこと。

けれども、どこまでいっても私の全体をつかむことはできない、そこに残されるのは〔^{ゴットレイト}像としての私〕である。それは、私の〈痕跡〉(Lévinas, 1974)であって、〔^{イメージ}想像としての私〕そのものではない。

ここでいう〔^{イメージ}想像としての私〕は理想の私の姿ではない。描くその瞬間には私の全体であると想って描く、〔^{イメージ}想像としての私〕。だが、全体としての私は手に入ることがなく、〔^{イメージ}想像としての私〕は描かれた先からズレていく。そして私は、〔^{イメージ}想像としての私〕を描きたいと欲望し、「私が、私を描く」という営みを繰り返す。それを望んでいるわけではないが、描かれたはずの〔^{イメージ}想像としての私〕は、足元から崩されていく。

これは、自分の理想(ナルチシズム)を追い求めるという種類の欲望——エゴイズム——とは異なる。完全に手にすることはできずと知りながら自らの全体像を手に入れようと欲望する。満たされることはないが、尽きることのない欲望である。

長谷(2003)は、欲望について、「他なるものを否定して自己に取り込み、満足することによって自己に還帰する欲望とは異なった、あるいは逆方向に向かう欲望がある。満たされようと欲することなく、満たされないことにおいて充足しているような欲望があるのである。」⁽³⁾と述べている。この語りから〔描く私〕の欲望を考えると、それは「自己拡大」へ向かう欲望ではなく、「自己無化」へと向かう欲望、あるいは「私は、私である」という自己同一性へと向かう欲望ではなく、「無」ないし「善」へ向かう欲望であると考えられるのではないか⁽⁴⁾。

(2) 対象化された私

デリダ(1998)は、デッサンという営みは対象物を見て描くことであるが、見る瞬間と描く瞬間は、どんなに短くても分離している、と述べている。さらに対象物を見て描くのではなく、記憶を描いている。デッサンのラインとは、そうした記憶の領域で成立するということを述べている。ここで用いられている「記憶」ということばは、「私が、私を描く」という文脈においては〔想像としての私〕^{イメージ}の生きる世界に通じるのではないかと考えられる。

「二重の属格。これはなんら同語反復ではなく、自画像というものの宿命である。一人の男の素描画家が盲者に魅惑されるにまかせ、盲者を自分の主題とするたびごとに、彼は素描画家の形象を、あるいは、ときには、より正確には、何かの女の素描画家のようなものの形象を、投影し、夢見、幻覚することになる。さらにより正確には、作用している最中の素描の力を、素描という行為そのものを、表象し始めるのだ。」⁽⁵⁾

「私が、私を描く」という営みにおいて〔描く私〕が描こうとするのは、〔想像としての私〕^{イメージ}である。描くというプロセスのなかで、私は私を対象化する。そこに現われてくるのは、描く対象としての私と見つめる対象としての私である。

私を描こうとして、私は鏡を見る。鏡に「姿を映し」、鏡を介して私は、「姿をあらわす」。フランス語における「見つめる」という動詞の性質から考えてみると、フランス語の文法において「見つめる」(mirer)という動詞は、再帰代名詞〈se〉を伴うことによって、「姿を映す」(se mirer)となり、また名詞化して「鏡」(miroir)となる⁽⁶⁾。

「私が、描く」ではなく「私が、私を描く」ときの再帰性の問題。ここで改めてレヴィナスの〈再帰〉の文脈に立ち戻ると、〈se〉という対格は「それは自己を失いつつ自己を再び見出すという事態」であるということから、「見つめる」という動詞が意味する営みも、自己を失いつつ、自己を再び見出すということなのではないかと考えることができる。

「この贈与のうちには、引退にして再描〔re-trait〕とでも言うべきものがある。それは一つの鏡が間に置かれることであり、不可能な再我有化ないし喪のことであり、逆説的なナルシスの介入でもあるが、このナルシスは、しばしば、無底のうちに失われていく。」⁽⁷⁾

〔想像としての私〕が私に描かせているという転回。描かれた私 (= 〔肖像としての私〕) が〔描く私〕の前に現われ、映し出したものが私を超えて私が、映し出されていく。〔肖像としての私〕は〔描く私〕から遠ざかっていく。〔描く私〕は遠ざかっていく私の〈痕跡〉を追い求め、想い、また描き始める。

〔描く私〕、〔想像としての私〕、〔肖像としての私〕、それぞれの間には時間的なズレも生じている。レヴィナスが指摘しているように、〈私〉は一点に留まる固定した存在ではない。「私が、私を描く」という営みにおいて、〔描く私〕は「現在」に留まることができない。時間の流れにより「自画像」に描かれた私 (= 〔肖像としての私〕) との間で引き裂かれた存在となる。変化しつづける〈私〉と「私は、私である」という自己同一性を維持したいという欲望の主体としての〈私〉のあいだにうごめきがもたらされる。レヴィナスは、この〈自我〉と〈自己〉、あるいは〈自己〉と〈自己〉自身とのあいだに生じるズレを〈古い〉ということばで語る。差異はもたらされるのではなく、差異こそが何ものよりも先行して、あるということ。自己差異化——私は老いていくのである。この文脈から「自画像」の語りを考えると、〔想像としての私〕が先行していないかぎり、私は「自画像」を描くことはできない、ということになる。

(3) もっとも遠い顔としての〔私の顔〕

「自画像」を描くという営みを行為の側面からではなく、体験として語るとき、そこには〈私〉の顔の語りとは異なる〔私の顔〕の語りももたらされる。

〈私〉は、「顔は、当然のように私のものとして、ある」と思っている。だが、その〈私〉が一旦、自らの顔を描く対象として見たとき、自分の目で直接確認することができないことに気づく。「触れる」という世界ではもっとも近かったはずの〈私〉の顔は、「見る」という世界において、他のどの顔よりも遠い顔となる。

時に顔は、その人の性格や感情のすべてがにじみ出ていると言われる。「顔は私のものである」という文脈において、顔は私の一部でしかないが、「私が、私を描く」という営みにおいては、〔想像としての私〕が顔に集約されて描かれることから、顔は私のもっとも固有なものとして、そして私のすべての表れであるかのように表現される。

前章で触れたように、レヴィナスは〈顔〉を実体としての顔そのものではなく、ひとつの体験として、あるいは隠喩として語っているが、「自画像」を描くという営みにおいても体験として顔を語るとき、顔は実体としての顔そのものではない。

〔描く私〕は、見ることのできないはずの〈私〉の顔を想像して^{みる}ということ。そして限りなく私に近く、それでいて「私ではない、私」がキャンバスに写される。こうして〈私〉の顔は、ひとつの対象物となる。対象物となった途端、その顔が〔描く私〕にまなざしを向けつづける。これは〈見る－見られる〉という関係の成立ではない。キャンバスへと移った〈私〉の顔は、一方的に〔描く私〕を見つめつづける、〔私の顔〕となる。レヴィナスは〈他者の顔〉から論じることによって、「私が、私である」という自己同一性への批判を試みているが、このような〔私の顔〕の語りからも〈私〉はより動かされる。「自画像」を描くという営みによってもたらされた、〔私の顔〕の語りの誕生という体験は、レヴィナスのいう〈他者の顔〉よりも、もっと遠くにある顔としての〔私の顔〕から〔描く私〕を見つめるということに他ならない。

レヴィナスは〔私の顔〕を語らない。しかし、レヴィナスの他者（の顔）を語るまなざしの彼方にあるのはもっとも遠い顔としての〔私の顔〕の語りなのかもしれない。

（４）「表現すること」へと向けられた、「自画像」からの問い

「自画像」を描くという行為は〈見る⇔描く〉という行為の繰り返しのプロセスとして語られる。しかし、その行為を「私は、私が思う、想像としての私を描く」という営みとして捉え直すと、何かに〔映された／写された私〕を描く〈見る⇔描く〉という行為の繰り返しであるというよりも、〔想像としての私〕が立ち現われてくることが描くことそのものであるということなのではないか。この営みをレヴィナスの〈再帰〉という観点から考えてみると、主格としての〔描く私〕は、対格としての何ものかを必要とする。この対格は、「私は、私が思う、想像としての私を描く」という文脈における〔想像としての私〕であると考えることができる。よって、「私が、私を描く」ということは、〔想像としての私〕の出現そのものであるということができないのではないか。「私が、私を描く」という行為の文脈では、その前提としての〔想像としての私〕の到来は語られることはない。

ここで、レヴィナスの「表現すること」に関する語りに耳を傾けてみる。

「表現とは思考に対し、後から付け加えられるようなものではないこと、表現は——比喩として——思考された主題の彼方へと思考を拉致すること、そして、そうした主題の彼方で——ハンマーや書類のように、いまだ手渡されうる主題の彼方で——文字は——自らの展開において、自らの文学において——〈語られたこと〉(le dit)の胚子を保ち

つつ、解釈者、つまり読者に対し、より遠く、より古い、ないし、より深い意味、インスピレーションによって与えられた意味をも許容すること——そう、それが、おそらく、知解可能性ということそのものなのである。表現は——みずから——それも単に有限な精神に対してではなく——書き手と読み手を必要とする。表現は、みずから、書物を必要とするのである。」⁽⁸⁾

この語りによれば、〈語ること〉(C表現すること)は、〈語られたこと〉(C表現されたこと)を必要とする。「書き手」の思考の中にある〈語られたこと〉は、「読み手」に対して〈語ること〉によって主題の彼方へと連れ去られるということ。ことばに限らず、人間によって表現された諸作品は、作者の意図を具現化し、経験を再演していると言われる。しかし、レヴィナスは〈語られたこと〉の地平において表現されたことば、あるいは作品を単なる反映——人間の精神の復元——であるとは捉えていない、と解することができるであろう。この語りに沿うかたちで、「私が、私を描く」という営みについて考えてみると、〔描く私〕は「表現されたこと」としての「自画像」からのまなざしを向けられることによって、「私は、私である」ということから離れていき、ふたたび「自画像」を描くということへと導かれていく。^{ポートレイト}〔像としての私〕からのまなざしを感じるたびに〔描く私〕はゆさぶられ、「自画像」を描くことを迫られるのではないか。

(5) 描かれた「自画像」からのまなざし

これまで、存在の自己証明としての「自画像」の意味を改めて問い直してきたが、自己同一性を追い求めているはずの「私が、私を描く」という営みのうちに〈私〉を差異化するズレがすでにもたらされていることが明らかとなった。ここでは、「自画像」を描くという営みにおける、さまざまな私——〔描く私〕^{イメージ}〔想像としての私〕^{ポートレイト}〔像としての私〕——の〈痕跡〉を辿り、さらに新たな問いへと向かう。

「自画像」は「〔描く私〕が〔描く私〕を見る」ということを前提として描かれる。そして、「〔描く私〕が、^{イメージ}〔想像としての私〕を想い、^{ポートレイト}〔像としての私〕を描く」ということが「私が、私を描く」という営みであるとすれば、〔描く私〕を見ているのは、^{ポートレイト}〔像としての私〕を見る〔描く私〕であり、その〔描く私〕がまた欲望の主体としての^{イメージ}〔想像としての私〕であるとき、その^{イメージ}〔想像としての私〕をできるかぎり「他者のような自己自身」として対象化することになる。それは、^{イメージ}〔想像としての私〕の存在を否定することではなくて、他者と

して生きられる〈私〉を見ることではないか。また一旦「自画像」が描かれると、そこには
ポトレイト
〔像としての私〕が眼前に現われ、「自画像」に〔まなざしを向ける私〕をまなざす。

自分を〈まなざす〉視線を感じるという体験、その視線に捉えられ、引き寄せられるとい
う体験が、レヴィナスの〈顔〉の体験そのものであったが、「自画像」を描くという営みの
中には二つのまなざしを見出すことができる。描かれたポトレイト
〔像としての私〕に向けるまなざ
しと、その「自画像」が〔まなざしを向ける私〕に向けるまなざし。しかもこの二つのまな
ざしは絡み合い、相互に応答しているわけではない。このまなざしは、ただただ、私を貫く。

「自画像」にまなざしを向けると、〔イメージ
想像としての私〕が描かせた、ポトレイト
〔像としての私〕
を、〔描いた私〕は見ている」という複雑な体験がもたらされることとなる。ポトレイト
〔像としての私〕は、〔描いた私〕とも「自画像」に〔まなざしを向ける私〕とも異なる。イメージ
〔想像としての私〕はポトレイト
〔像としての私〕として立ち現われた途端に私からズレていく。

「自画像」は、〔見つめる私〕にまなざしを向けつづける。「自画像」に〔まなざしを向け
る私〕は、同時に自分をまなざす視線（自分に向かうまなざし）を感じ、その視線に捉えら
れ、引き寄せられる。その体験は〈見る－見られる〉という関係の成立ではない。「自画像」
に描かれたポトレイト
〔像としての私〕は、見られる対象物でありながら、対象物であることを否定
しつづけるのである。そこでは、「私であり、かつ私ではない」という事態が絶えずくりか
えされている。

「私が、私を描く」、「〔描かれた私〕と〔描いた私〕」、「〔描かれた私〕に〔まなざしを向
ける私〕」、「〔描かれた私〕によって〔まなざしを向けられる私〕」……。 「自画像」をめぐる
さまざまな営みにおいて、私は常に「私とは何か」という問いを突きつけられるのである。

本論は「自画像」を自ら描くことをとおして体験された私という視座から、「表現するこ
と」を考察する試みでもあった。「自画像」を描くという私を表現する営みにおける、「表現
すること」とは、「私は「自画像」を描くことによって、私を描いている」とも言えるし、
「描くという営みの中で私を生きている」ということもできる。この描くという営みの中で
生きる私が体験される。それが、「私への問い」と「私からの問い」のはざまで、私が生き
るということではないか。

こうして、「自画像」を描くことによってもたらされる私をめぐるさまざまな問いは、多
様な意味を生み出す生成の場となるのではないだろうか。

おわりに

合田(2000)によれば、レヴィナスは彼のテキストの中に〈私〉を読むことを否定しているという。そうであるとすれば本稿の試みは、レヴィナスに反して、行われているということになろう。本稿は「自画像」の提起するさまざまな問い、そしてレヴィナスのまなざし、それらが複雑に交叉する場に〈私〉を位置づけて、そこから語ること、またそこに〈私〉を探し出そうとする試みでもない。言ってみれば、その場に曝される私のあり様を描くという試みであった。

ここで、本稿における「体験からの語り」ということの意味について述べておく。

「道徳意識としての私にとって、体験とはいかなる先験的枠組にも収まらない体験、すなわち概念なき体験なのだ。これ以外の体験はどれも概念に関する体験である。言い換えるなら、これらの体験は私の所有物と化し、私の自由に属する。」⁽¹⁾

本稿での体験ということばは、この「概念なき体験」というレヴィナスの語りに近い。つまり、身体的、心理的、時間的な近さを強調するような体験主義の文脈によって定義される体験ではない。「体験からの語り」における体験とは、「限りなく変化し、多様化する生を生きる」ということであり、そこから語るということは、私たちの認識それ自体を問うということに他ならない。レヴィナスのことばを借りるならこの体験からの語りとは「意識の問い直し」であって「問い直しの意識」ではないということであろう⁽²⁾。

筆者は臨床教育学への関心を深めるなかで、臨床心理学の応用の学としての臨床教育学ではなく、さまざまな語りの様式の問題から認識のあり方そのものを問い直すような学問としての臨床教育学のあり方を模索していく必要があると考えている⁽³⁾

筆者の当面の研究スタイルは、レヴィナスの語りを私という体験に重ね合わせて読むことにある。果たして、そのような試みは臨床教育学の地平において何らかの意味をもつことになるのであろうか。筆者にとって、臨床教育学のもつ雰囲気は、「自らの声を自らのうちに聴く」という体験にごく近いものであるという感触がある。なぜなら、臨床教育学の語りの場においては「なぜ私は、ここにいるのか」「何のために学問をやるのか」、そして最終的に「私とは何か」という根源的な問いが突きつけられているからである。この体験のうちには確かな感じなど一つもなく、自らの研究の、もっと正直に言えば、筆者の存在それ自体の足場となるようなものは未だ何一つ見つかっていない。そんな彷徨の道程で、「レヴィナス」

を読み始めた。なぜ「レヴィナス」なのかと問われれば、表面的には、彼の理論への関心、主にフッサールを基盤とした現象学の視点であるとか、〈他者〉という視座に魅力を感じているから、と答えることもできるかもしれない。しかし、実のところ、彼の語りそのものの中に、筆者にとっての臨床教育学の感触があるからである。たとえば、「私は、私である」ということが自明な（であると思い込んでいる）時代に生きている筆者にとって、暴力的な差異化としての「テロリズム」の問題をどのように考えていくのか。このような問いに対して、「アウシュヴィッツ」という時代性を生きたひとりの思想家の語りは、今日の「テロリズム」という時代性を深く問い直す視点を与えてくれるのではないか、という期待がある。

さまざまな語りに曝されながら体験としての私という視座から語っていくことの可能性を模索すること、これが筆者に課せられた課題である。

※註

はじめに

- (1) 筆者は卒業論文においてレヴィナス研究の方法論としてレトリック論の立場からのアプローチを試みている。このアプローチの際にレヴィナスのテキストをひとつの教説と見立て、彼の“語り方”や、“文体”に着目している。一方、本稿は「語ること」「描くこと」を同じ地平で捉えていくという試みでもあることから、冒険的に“語りの様式”^{スタイル}ということばを用いている。また、様式（スタイル）ということばの理解に関しては、山田忠彰他編『スタイルの詩学』（ナカニシヤ出版、2000年）を参照した。
- (2) このような方法論的視座は、皆藤章『生きる心理療法と教育——臨床教育学の視座から』（誠信書房、1998年）、皆藤章「臨床教育学の構想——体験をとおしてもたらされた覚書」^{ラフスケッチ}、皇紀夫編著『臨床教育学の生成』（玉川大学出版部、2003年、33-57頁）を参考にしている。

1章

- (1) 鷺田は『顔の現象学』において、自分の顔について、以下のように述べている。「わたしたちは、自分の〈顔〉から遠く隔てられている。あるいはそこへと直接的な通路を欠いている。言いかえると、わたしは自分の顔に、（自分でも気づかない）その微妙な変化に、他人の顔をまなざすことによって、間接にしか近づくことができない。私がそれであるところのものに他者を經由してしか近づかないということ、このことは、〈わたし〉というものがけっして閉じた存在ではないこと、〈わたし〉というものが穴やすきまだらけのイメージのようなものとしてしか存在しえないことを示している。」（鷺田清一『顔の現象学』講談社学術文庫、1998年、22-23頁）

2章

*レヴィナスの著書に関しては邦訳の頁数をスラッシュ (/) のあとに併記する。

ペーパーバックのあるものは、すべて、それに従って頁数を記してある。

(1) Lévinas (1961): *Totalité et infini, Essai sur l'extériorité*, La Haye, Martinus Nijhoff, (合田正人訳『全体性と無限』国文社、1989年) — 以下、TIと記す。

(2) J=L. ナンシー他著『主体の後に誰が来るのか』(現代企画室、1996年) 参照。

(3) Emmanuel Lévinas (1974): *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Martinus Nijhoff, p. 177 (合田正人訳『存在の彼方へ』講談社学術文庫、1999年、261頁) — 以下、AAと記す。

(4) 「〈se maintenir〉、〈se perdre〉、〈se retrouver〉の〈se〉は、ひとつの結果ではなく、これらの代名動詞が表わす諸関係ないし諸々の出来事の母型 (matrice) そのものである。」(Lévinas, AA, p. 165/244 頁)。フランス語において一般に再帰代名詞が用いられる場合の典型的な状況は、「行為者の他動的行為の対象が行為者自身である」状況である。例えば、「自殺をする」という言葉を「自らを殺害する」と表現する。また、〈再帰代名詞 se〉は、「諸事物が現れる (se montrent)」、「艱が折りたたまれる (se plient)」、「諸観念が理解される (se comprennent)」といった表現でも用いられている。また、文法上では、一般に再帰代名詞とは他動詞を自動詞化する手段であると定義されている。

(5) Lévinas, AA, p. 270/391-392 頁

(6) Lévinas, *ibid.*, p. 183/269 頁

(7) Lévinas, *ibid.*, p. 186/272 頁

(8) Lévinas, *ibid.*, p. 181/265 頁

(9) Lévinas, *ibid.*, p. 136/204-205 頁

(10) Lévinas, *ibid.*, p. 184/271 頁

(11) Lévinas, *ibid.*, p. 26/42 頁

(12) Lévinas, *ibid.*, p. 82/422 頁

(13) Lévinas, *ibid.*, p. 199/289 頁

(14) Lévinas, *ibid.*, p. 88/134 頁

(15) Lévinas, *ibid.*, p. 86/131 頁

(16) Lévinas, *ibid.*, p. 145/218 頁

(17) Lévinas, *ibid.*, pp. 148-149/223-224 頁

(18) Lévinas, *ibid.*, p. 149/224 頁

(19) 筆者はここに、ひとつの体験として私を表現することの可能性を感じている。

3章

(1) J. J. ルソー (生島遼一訳)『告白』創元社、1947年、1頁

(2) 田中英道『画家と自画像 — 描かれた西洋の精神』講談社学術文庫、2003年、50-51頁

- (3) 長谷正當『欲望の哲学——浄土教世界の思索』法蔵館、2003年、6頁
- (4) レヴィナスの〈欲望〉に関して長谷(2003)は以下のように解釈している。「レヴィナスは人間において他者へ、つまり無限へと向かわしめるものを欲望として捉え、「他者への欲望」を「形而上学的欲望」と名づけている。その際、レヴィナスが他者への欲望とするものは、自己に還帰することによって満足するような欲求(besoin)ではなく、還帰しないことにおいて満足しているような欲望である。そのような欲望は、自己に還帰して自己満足に至る欲望(欲求)の上に成立する自我が破られ、乗り越えられるところにおいて初めて目覚めてくる。そのような形而上学的欲望をレヴィナスは宗教的信の根幹に捉えている。」(同書、215頁)
- (5) J. デリダ(若桑他訳)『盲者の記憶——自画像およびその他の廃墟』みすず書房、1998年、3-4頁
- (6) ラテン語の「*mirror*」が、「驚嘆して見る」「驚く」という意味の動詞であることから、鏡に自分の姿を移して見ることのうちには驚きが含まれている。
- (7) J. デリダ(若桑他訳)『盲者の記憶——自画像およびその他の廃墟』みすず書房、1998年、4頁
- (8) Emmanuel Lévinas (1975): *Excercices sur la folie du jour*, in *Sur Maurice Blanchot*, fata morgana, (若森栄樹訳『白日の狂気』についてのエチュード』『ユリイカ 特集モーリス・ブランジョ』第17巻第4号、青土社、1985年、228-240頁)
- (9) 「他者のような自己自身」に関しては、P. リクール(久米博訳)『他者のような自己自身』(法政大学出版局、1996年)参照。

おわりに

- (1) Lévinas, TI, p. 105/146頁
- (2) Emmanuel Lévinas 1972 *Humanisme de l'autre homme*, Montpellier, ed. fata morgana, p. 53 (小林康夫訳『他者のユマニスム』水声社、1990年、79頁)
- (3) このような臨床教育学の方法論に関しては、皇紀夫「なぜ〈臨床〉教育学なのか——「問題」の所在と理解——」、和田修二編『教育的日常の再構築』(玉川大学出版部、1996年、38-39頁)あるいは皇紀夫「教育学における臨床知の所在と役割」『近代教育フォーラム』第10号(教育思想史学会、2001年、115-127頁)を参照している。

✦引用・参考文献

- Emmanuel Lévinas (1961): *Totalité et infini, Essai sur l'exteriorité*, La Haye, Martinus Nijhoff,
(合田正人訳『全体性と無限』国文社、1989年)
- Emmanuel Lévinas (1972): *Humanisme de l'autre homme*, Montpellier, ed. fata morgana, p. 53
(小林康夫訳『他者のユマニスム』水声社、1990年)
- Emmanuel Lévinas (1974): *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Martinus Nijhoff, (合田正人

訳『存在の彼方へ』講談社学術文庫、1999年)

Emmanuel Lévinas (1975): *Exercices sur la folie du jour*, in *Sur Maurice Blanchot, fata morgana*,
(若森栄樹訳『『白日の狂気』についてのエチュード』『ユリイカ 特集モーリス・ブランジョ』第
17巻第4号、青土社、1985年、228-240頁)

Emmanuel Lévinas (1984): *De l'existence à l'existant*, Paris, Editions de la Revue Fontaine, (西谷
修訳『実存から実存者へ』講談社学術文庫、1996年)

Emmanuel Lévinas (1991): *Entre nous, Essais sur le penser-à-l'autre*, Grasset, (合田他訳『われわ
れのあいだで』法政大学出版局、1993年)

合田正人『レヴィナス——存在の革命へ向けて』筑摩書房、2000年、306-316頁

長谷正當『欲望の哲学——浄土教世界の思索』法蔵館、2003年、6頁

J. デリダ (若桑他訳)『盲者の記憶——自画像およびその他の廃墟』みすず書房、1998年、3-4頁

J. J. ルソー (生島遼一訳)『告白』創元社、1947年、1頁

J=L. ナンシー他著『主体の後に誰が来るのか』現代企画室、1996年

皆藤 章『生きる心理療法と教育——臨床教育学の視座から』誠信書房、1998年

皆藤 章『臨床教育学の構想——体験をとおしてもたらされた^{ラフスケッチ}覚書』、皇紀夫編著『臨床教育学の生成』
玉川大学出版部、2003年、33-57頁

熊野純彦『レヴィナス入門 ちくま新書』筑摩書房、1999年

熊野純彦『レヴィナス——移ろいゆくものへの視線』岩波書店、1999年

熊野純彦『差異と隔たり——他なるものへの倫理』岩波書店、2003年

三浦 篤『自画像の美術史』東京大学出版会、2003年

港道 隆『レヴィナス——法—外な思想』講談社、1997年

P. リクール (久米博訳)『他者のような自己自身』法政大学出版局、1996年

P. リクール (久米博訳)『生きた隠喩』岩波書店、1998年

佐藤義之『レヴィナスの倫理——「顔」と形而上学のはざままで』勁草書房、2000年

田中英道『画家と自画像』講談社学術文庫、2003年、50-51頁

鷺田清一『ちくはぐな身体』筑摩書房、1995年

鷺田清一『顔の現象学』講談社学術文庫、1998年、22-23頁

山田忠彰他編『スタイルの詩学——倫理学と美学の交叉^{キアスム}』ナカニシヤ出版、2000年

(いしざきたつや 京都大学大学院教育学研究科修士課程)